

「デザインと怪談もイメージ世界」 工業デザイナー×怪談家、ものづくりを語る

稲川淳二
さん



いながわ じゅんじ：東京都渋谷区恵比寿出身。1947年8月21日生まれ。1966年、桑沢デザイン研究所インダストリアル科に入学。1971年、株式会社共立デザインにデザイナーとして入社。ラジオパーソナリティやテレビ番組でリアクション芸人として活躍し、お茶の間の人気者になる。怪談家としても著名で、怪談ライブ「MYSTERY NIGHT TOUR 稲川淳二の怪談ナイト」は今年で26年連続公演となる。工業デザイナーとしての活動では、1996年通商産業省選定グッドデザイン賞、2012年桑沢スピリット賞を受賞。近年では「稲川フォント」と呼ばれる非常に美しい直筆の書体を披露したことも注目を集めた。古稀を迎えた今もなお、精力的に活動を続けている。

子供のころからデザイナーを目指し「車止め」でグッドデザイン賞を受賞

——稲川さんは怪談家として有名ですが、ほかにどのような活動をされているのでしょうか。

デザイン関係の活動や、障がい・人権関係の講演を行っています。今は自分で設計するというよりも、デザイン事務所の企画会議に参加して、「ここは、こうした方がいいんじゃないか」といったアドバイスを送ることが多いです。

実は、夏の全国ツアーのキャンペーンが始まる前の5月頃までは、デザイン関係の仕事を結構やっているのですよ。お世話になった桑沢デザイン研究所で行われる表彰式では、毎年恒例で司会進行をさせていただいていましたし、活躍するデザイナーたちからとても刺激を受けています。

——デザイナーを目指したきっかけは何ですか。

小さい頃から絵を描くのが好きで得意でしたから、デザイナーとして生きていこうと思っていました。怪談は好きで夢中になっていましたが、商売にしようとは思っていませんでしたね(笑)。

デザインの中でも特に、テレビや舞台のセットの図面を描く芸術をしたかったです。好きな絵が描けて、レタリングもできて、図面も描けますし、何よりテレビや舞台は華やかですからね、やってみたいなあという気持ちがあったんです。

それで、23歳の頃、デザインの事務所に入って簡単な舞台を作り始めたのが、デザイナーとしての始まりです。

——どういった作品を手掛けたのでしょうか。

新幹線に乗っている車掌さんが回ってきて、切符を見せることがあるじゃないですか。あの時に、ビビってやる検札機は私が設計したんですよ。ほかに、初期のバーコードリーダーの設計や、スポーツカーのデザインなど、いろいろやりました。すごいでしょ(笑)。だから、中小企業のものづくりには、とても関心があるんですよ。

1996年には、自然石を使用した車止めでグッドデザイン賞をいただきました。私たちが子供の頃は、そもそも車の台数が少なかったから道路で遊ぼうと平気でした。しかし、今は車社会になっ

て、いたるところを車が通る。交通事故は悲しいですからね。当時は、そんな悲しい事件を少しでも減らしたいという想いで設計しました。

工業デザインというのは、一点もののアートデザインとは違って、生活に馴染んで使ってもらえないといけません。ですから、車止めは単に人と車を区切る役割だけではなく、景観に溶け込むことも大切だと考えて設計しました。子供の頃の思い出の場所の片隅に、あの車止めが映っていたら嬉しいですよ。ええ。

私が芸能の仕事をしていることは、デザイナーの仕事にも良いほうに働いていたと思います。デザインを発注してくれるメーカーの担当者は、いわゆる課長クラスの方が多い。そうすると、小さい子供がいることが多いじゃないですか。当時、私は子供向け番組に出ていましたから、「じゃあ、稲川さんをお願いしようか」というきっかけで仕事をいただくこともありました。

実は稲川さんが設計していた、検札機(左)とバーコードリーダー(右)



1996年に通商産業省選定グッドデザイン賞を受賞した車止め



【写真提供】
ユニオフィース

設計中の若かりし稲川さん(40代半ば頃)

続きは雑誌で